

# ことばに見る現代っ子の知性



室 谷 幸 吉

今日、子どもたちの身体的・精神的発達加速現象が著しいといわ

れている。それが本当なら子どもらの加速的な発達は、また彼らの

コトバの生活面にも如実にあらわれてくるはずだ。子どもの知恵

は、コトバの獲得と一体となって伸びていく。そこでコトバが、

「知恵伸び・知恵育ちのパロメーター」と考えられる。

子どもの獲得語には、実はさまざまな段階がある。

まず、子どもが自分の生活の中で、自由自在に使いこなせるよう

になっているコトバの群がある。子どもの意識圏内にキチンと座を

占め、認識活動にいつでも動員可能な態勢にあるコトバである。と

ころが、これとは反対に、子どもにはただ何とはなし、耳に聞き

とめていただけといった種類のコトバもある。子どもたちが毎日平

均二時間半も多い子は五時間もテレビを視聴しているといった現

今、この種のコトバは、日に日にふえていく傾向にある。

また、おぼろげではあるがコトバの意味は推知しているが、その

コトバに対する推知的理解が正確な働き方に則したものではなく

て、理解の仕方・とらえ方に何がしかのズレがある。意味を感じが

いし、誤解して覚えているといった類のコトバがある。この類のコ

トバは、くり返し使用されたり、耳から聞きとったりして、徐々に

誤りに気づき、正しい意義や使用法に修正されていくのである。子

どもらは、こんな手順を経て、生活圏内に強い発言力をもつコトバ

をふやしていく。

これまでのことを、表解式に整理すると、

★A——— 熟したコトバ

① くらしの中で使いこなされていることば

こどもの現有語い

品詞別 頭音別	総語数	名詞類	動詞・ 形容詞類	外来語類
清音類	2527	1851	336	340
濁音類 濁半濁音	639	326	128	185
拗音類	226	151	38	37
総計	3392	2328	502	562

② 使いこなされるところまではいかないが、聞いて意味はよくわかることば

★B——熟さないコトバ

③ 意味の推測はできるが、不確かなことば

④ 聞きおぼえてはいるが意味はわからないことば

以上のような四通りの性質のものが混在しているわけだ。そして、その混在の度合は、個々の子どもによってかなり大きな開差がある。その一つは子ども自体の知能の質であり、第二には、子どもをとりまく広範な生活環境である。

★

四月（昭和三十九年）に小学校の一年にスタートした子どもたち、約四十人（いずれも東京の山の手に住む中流家庭の男女児）について、ひらがな五十音の読みと書き方の指導とを併行させながら、それぞれの音からはじまる単語を、子どもたちに思い出される限り思い出させていちいち記録していった。この稿に整

理した子どもの語いというのは、そういう学習の結果まとめられたものである。

語頭音に拠りつつ、子どもの集団が思い出し、取り出してきたコトバ、つまり想起語を整理してみると、清音に属するもの約二千五百語、濁音・半濁音に属するものは約六百五十語、次に拗音に属するものは約二百三十語で、これを合わせるとおよそ三千四百語となった。ところでここに想起された三千四百という語数は、必ずしも子どもたちが現在所有し、あるいは理解されている語数そのものを示すものではない。多分想起の網から落ちこぼれた語いもあるだろうし、想起された総語いが、実際生活場面での使用ということになると、おそらくは万本なく、濃い密度で使われているとはいえないだろう。

また一方では、ここに拾い込まれた想起語いは、そのすべてが子どもたちに、かなり深く確かさをもってわかっている理解語だと考えてもよいように思われる。

総語数三三九二語中、動詞・形容詞性の活用語が五〇二語で、語いの一割五分（一四・八％）だということには、関心をもちたい。一つの見方では案外少ないではないかとも考えられる。動詞性質をひそめた語いが割合に少ないというのは、生活内容の貧困さ、表現活動の貧弱さ、物質による精神活動の荒廃や盲目化などと、重なり合った現象なのではなからうか。そうだとしたら、ここに放置し

てはおけない重要な『子どもの認識形成・人間形成・パーソナリティ形成』上の問題がひそんでいると思われる。

わが国本来のコトバにくらべて、外来語が五六二語だということにも注目をひかれる。ここにも今日の時世に生きつつある子どもたちのきわめて特徴的な一面が顔をのぞかせていることを指摘しておきたい。外来語については更に後述する。

★

動詞・形容詞類が一つもあげられないという語頭音があった。清音では「く・ら・り・る・れ・ろ」の六音。拗音は「ひゃ・ひゅ・びょ・にゅ・みゃ・みよ・りゅ・りよ・ちゃ・じょ」またつぎの四つの拗音「びゃ・びや・びゃ・みゅ・りゃ」では、動詞・形容詞類と限らず名詞類の語も外来語も、要するにコトバの形をとったものは一つも子どもたちは取り出さなかった。

さらに特徴的に思われたのは、清音の「ら・り・る・れ・ろ」と拗音の「じゃ・きゃ」の七音では、外来語がきわだつて多いということであった。

★

清音44、濁音・半濁音23、拗音25、以上の100音中で最も多数の語がとりだされたのは「は音語」の139、二位は「お音語」の112、三番目は「い音語」の107であった。

また想起された語数中少ない方では一語もなかった「びゃ・び

ゃ・みゅ・りゃ」を除いては「ひゅ・びょ・にゃ・によ・みゃ」の五拗音で、それぞれ一語があげられたきりであった。清音で少ないのは「る音語」の8語、「ぬ音語」の18語といったところであった。

★

ここで、この研究調査にもとづいて、特に指摘しておきたいことがらを二、三実例をあげながら述べていこう。

コトバは基本型の語と複合語とに分けることができる。

箱とか球は基本型の単位語であり、貯金箱とかゴムまりとなると複合語である。

社会の進歩・文化の発達、今までに存在しなかったさまざまな物を、次々と新たにつくりだす。日に日に目新しい新薬が誕生し、その毎に、何やらもったいぶった、舌でもかみそうな洋風のカタカナ名称がつけられる。化粧品にしても事情は同断。しかもこのような手をかえ品をかえての新製品提供の傾向は、ひとり医薬や化粧品に限らない。これらの新事物の名称は多くの場合、複合・合成語的型態で名づけられるという特徴をもっている。子どもたちは巨大なマスコミ産業に乗せてP・Rされるそれらの名称を、コマージュ型ソングの形で、あるいはマンガなどの映像を介して意識界の中へ獲得・吸収・記憶していくのである。

▼ナルトオレンジ・ソントンジャム・マッシュポテト・レモンパイ・ハイクラウンチョコレート・ハイミルク・ハリスガム・サラミ

ソーセイジ・ビーターバンふりかけ・ベルカレー・明星ラーメン・バームクーヘン・ストロンソーダー・スキップチョコ……と、まあ子どもらの生活にすばやく、しかも強く結びつくのは食べものの名である。それにしてもなんとカタカナ書きの多いことか。

▼人間が密集する都会では、それに応じた生活態勢を個々の人がとり、社会は社会で、人間集団を手きわよくさばくためのさまざまな秩序や法的規制を必然的に作り出す。それらに関係深いコトバに目を向けてみると——交通安全・横断歩道、駐車場などからはじめて、工事現場・深夜放送・短期大学・日赤産院・にせさつ犯人・婦人洋服売場・ヘルセンター・予防注射・面会中止・冷凍完備付き・道路ローラー・特急こだま・新婚旅行・天気予報・ガソリンスタンド・バックミラーなどとまことに多彩。そして社会行動の秩序保持・取り締り機関としては鉄道公安官・水上警察・保安部・陸上自衛隊という工合にとりあげられている。

▼薬品・化粧品類では、コールドクリーム・フッ素サンスタールル・リキホルモンなどといった薬の名もひろい出される。

その他ソーダラップ・マジックプリント・ロンマンカー・リコトーフ・ルームクローラー・ベビーギャング・テンプルブリッカー・キー・テーブルコーダーと、とにかく外来語とダブルことばの多いのに驚く。これらのコトバをじつとながめていると、日本生えぬきの、歴史と伝統の中に育って来た日本語そのものの影が薄くなり、

消えかかっていくように感じられ、何かさびしい気持ちにおそわれる。これらコトバの多くは、西欧化した生活の産物にちがいない。生活の洋風化は、また大なり小なり精神や思考の洋風化をも伴っている。そしてそれが日本人自身の自己喪失現象となって立ちあらわれてくる時、深刻な社会問題となるのである。

▼人間ミサイルやカラー写真・電子頭脳・人工衛星・人造人間・十万馬力・火星探検など、近代科学の産物である用語にも、子どもらの関心はかなり鋭く向けられている。

▼少年探偵団・氷砂糖・化粧道具・せんたくばさみ・銀行泥棒・がんこじじい・学習記録・教会学校・なま牛乳・肉まんじゅう・物知り博士・冷血動物・蠅たたき・夫婦げんか・雪だるま・四谷怪談・わんぱく小僧・人食い土人……などは一応日本語としての原型を保持した素直な複合語とみていいだろう。



子どもらが獲得している（獲得しつつある）コトバについて、特徴的なことは、きわだって外来語が多いということ。国籍が日本以外であるコトバが一六・六％ということは、とにかく注意をひく現象である。

マーケット・ミキサー・ミサイル・ノート・ライター・リーダー・リレー・パンツ・バジャマ・パーマ・プール・ベビー・ジャンプ・ジヤングル・ボクシング・バレーボール・ベット・ベンチ・スリル・

スモッグ・スコップ・スパイ・スリッパ・スケート・サーカス・シ  
ロップ・エッチ・オルガン・オルゴール・ケープルカー・コンクリ  
ート・ココローラー・カメラ・カラー……などのように日常化性の  
高いものから、ソーダラップ・ヘルメット・ミスター・ノック・  
ノーベル賞・モーション・メーキャップ・ラッシュ・リモコン・レ  
ーダー・レモネード・レックスン・レジスター・パンチ・ヒステリー  
・フラット・パーキング・ピッコロ・ピース・ベスト・ベンジン・  
ポリリウム・ベルト・ボンゴ・ボス・デラックス・ドッグ・ドライ  
バー・ブーツ・ペランダ・ショック・スタミナ・サランラップ・サ  
イズ・コックドール・コルト・キッチン・ツベルクリンとやや特殊  
なものまでひろいあげていくときりがない。まことに「現代っ子版  
洋風日本語」とでもいう用語集を作らねば使いこなせないほどの壯  
観である。

このように、広い各領域にわたって、洋語が流入している。日本  
産日本語への洋語の激しい浸透圧を、まざまざと感じさせられるわ  
けである。

★

子どもらの頭脳の網にひっかかっている文化度の高い・抽象度の  
高い・意味度の高いコトバ——という視点から、いくつかの語いを  
ひろってみよう。現在の社会でも一般性を持ったコトバとして生き  
て働きつつあり、注目すべき問題がひそんでいるように思われるか

らである。

▼免許証・一方通行・人気絶頂・一機曹(自衛隊)・沈没・警部・  
決闘・専務・責任・基地・必死・判決・誘拐・予告篇・各国・課長・  
監視員・スタミナ・紫電改・許可・調査・聴衆席・表彰・書類・署  
名・証明書・主任・脱出・奴隷・現行犯・現代……など、目につく  
二、三をひろっただけでも、社会関係語としてかなり重要なものが  
認められる。専務とか主任とか証明・許可など会社などに縁の深い  
経済関係の語いが、すでに想起されるところにも現代の特徴があり  
ありとうかがえる。

▼医学やその他の科学に関係あるコトバも相当数あげられてい  
る。例えば——胚種・疫痢・結晶・血漿・腕腸・電子頭脳・雑種・  
月食・獣医・ウラン・輸血・熔岩など・それからト長調・ト音記号  
・音痴などには、音楽趣味の社会的普及の広まりがしのばれる。

▼「灯台もとくらし」とか、「短気は損気」とか、「無理が通れば  
道理がひっこむ」——このような諺や格言に対して理解と知識が相  
当にもたれている事実もとりあげておかねばならない。

★

つぎに、子どもたちの言語意識や言語知識の拡大について、テレ  
ビの存在は無視できない。テレビを介して、子どもらのコトバに対  
する知識や意識や感覚は、よかれあしかれ、相当にはげしい推力と  
テンポをもっておしひろげられていきつつある。子どもらのコトバ

の純正さを失わせまい、子どもらのコトバを正しく美しいものに育てていこうとする時、テレビの働きをどのように位地づけたいのであろうか。この問題について私たちは常に深い関心を失わず、テレビに対する卒直・嚴重な批判者にならねばならないだろう。

▼忍者部隊月光・一本手裏剣・ごほう手裏剣・鉄人28号・鉄腕アトム・コンバット・ボバイ・ベンケーシー・アラアの使者・エイトマン・狼少年ケン・ツララまじん・バックスパニー・三ばか大将・鉄のサムソン・名犬ラッシー・ハリマオ・マリンコング・ムー帝國(海底軍艦)・スーパーマン・マグラー・ミッキーマウス・バックス・ミスターシックス……それから三菱ダイヤモンドアワー・ゴールデンアワーとテレビなしには出てきような子供らコトバであった。こうしたコトバが、子どもたちの日常生活の中で、注釈ぬきで通用している今日である。テンポののろいおとなは、ちょっと今の子どもたちにはついていけそうもない。子どもたちの話し合いの仲間に入りにくい、子どもたちとは話があわなくなっているというおとなの側の現象の原因は、たしかにこんなところにもあるようである。

★

子どもたちは動物や植物について、どれほど言語化される知識をもっているものだろうか。動物も植物も、子どもらの身辺には、全くありふれた接触度の多いものなのである。子どもらは思うほど動

植物についての知識は持っていない。動植物への関心——と同時に動植物への生活接触や経験的接近はおそろしく弱く、そして貧しいものように思われた。とくに都会住いの子どもになると、こういう傾向は一層著しいであらう。日に日こうすらいでいく自然への接触が、こういう形をとっているにちがいない。

動物はまだしも植物——草花となると、全くおはなしにならぬほどの貧弱さだ。草花の名などはほとんど知っていないといっている。「ざざんか」が「さくら」になり、「つばき」もまたおなじく「さくら」になってしまふ。竹をみてササといい、マツもヤナギも區別つかないという子どもたちの知恵——この甚しいかたよりは、ゆたかな人間を形成しようとする場合、かなりの問題にされねばならない欠陥の一つを露呈しているのではないか。

★

子どもらの感性・情感の世界は、多種多様でケンランたるコトバの所有の割には、豊かでもなく個性的でもないのである。コトバの獲得と増大は、単に知覚・知識の面に止まることなく、より広い情緒的世界へ向かって創造的に放出され、縦横に活躍する時、本当の意味でコトバのいのちを充実させることになるのではないか。そういう方向に沿う配慮が、どうもまだまだ欠けているように思われてならない。

(明星学園)